OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	コロナ禍におけるバーチャル留学と英語学習意欲に関する探索的調査
Author(s)	堀, さやか; 箱守, 喜満子; 藤田, 清士
Citation	大阪大学高等教育研究. 2022, 10, p. 33-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87508
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学高等教育研究　10（2021），33 − 40

【教育実践レポート】

コロナ禍におけるバーチャル留学と英語学習意欲に関する探索的調査

堀　さやか[※1]・箱守　喜満子[※1]・藤田　清士[※1]

An exploratory analysis of learning English through virtual study abroad in the New Normal

HORI Sayaka[※1], HAKOMORI Kimiko[※1], FUJI-TA Kiyoshi[※1]

コロナ禍において，移動を伴う人的国際交流には厳しい制限が課せられている．教育現場では，海外留学を志す学生を海外に送り出せないというジレンマの中で，新たな留学の形として，「バーチャル留学」が誕生した．本報告では，「理工系学部生のための海外英語研修」を事例に，学生の英語学習意欲に与える影響とその課題について考察した．アンケート結果によると，参加者は，より英語が好きになっている傾向がみられ，留学前よりも英語に対する苦手意識が無くなり，現地留学に近い学習効果があることがわかった．また，バーチャル留学を提供する教育者として注意するべき点は，質の高い教育を提供できる提携校と組むことは前提条件であるが，①時差への配慮，②孤立させない体制づくり，③放置しないサポート体制であることがわかった．今後も，より質の高い教育方法について探究していくものである．

キーワード：バーチャル留学，コロナ新時代，英語学習意欲，SNS，コミュニケーション

The border has been closed to limit the further spread of coronavirus; travel restrictions set worldwide in 2021.It catapulted the virtual study abroad program to the forefront. International Virtual Study Abroad is becoming popular as a new approach to providing international experiences to Japanese students. The advantage of online education over on-site study is that it is far easier to access for a broader range of students. In this study, we analyzed the efficiency of virtual learning on students. It turned out that building a blended educational program combining virtual study abroad and domestic support is one of the solutions.

Keywords：Virtual study abroad, The New Normal, Positive motivation for learning English, SNS, Communication

1. はじめに

2020年から世界に広まった新型コロナウイルス感染症は，2021年11月現在で，2億5,000万人が感染し，500万人を超える人が亡くなっている．100年に一度発生する感染症，スペイン風邪に次ぐ，未曾有の感染症は，教育現場の常識を一変させ，我々に新たな挑戦への道を歩ませることとなった．大阪大学においても，西尾総長の言葉を引用すれば「“新しい日常”と呼ばれる言葉が示すとおり，科学，技術，医療制度，経済システム，会社組

所　属：[※1]大阪大学大学院工学研究科国際交流推進センター
Affiliation : [※1]Center of International Affairs, Graduate School Engineering, Osaka University
連絡先：sayaka.hori@fsao.eng.osaka-u.ac.jp（堀　さやか）

織，コミュニティ個人の生活や価値観等，社会の全ての面でこれまでの常識を見直すことで，変革すべき点を明瞭にし，それを実践し，新時代を迎える機会とも捉えることができる.」とし，前向きにこの時代を突き進むという意識を持って，大学組織全体でこの難局を乗り越えようとしている.

ワクチン接種によって国内感染者の増加ペースは緩やかになっているが，イギリスやドイツでの感染増のニュースに，まだまだ先行きは見えない．移動を伴う人的国際交流には厳しい制限が課せられている．海外留学を志す学生を海外に送り出せないというジレンマの中で，新たな留学の形として，学生に提供するプログラムに「バーチャル留学」が誕生した．夏期研修のような短期留学プログラムは，入国時の防疫措置があることから現地留学が難しく，来年の春学期短期留学においても，バーチャル留学に頼らざるを得ない状況は続くとみている．早くとも，来年の夏期研修でオンサイト留学（現地留学）が可能になるかどうかという状況であるが，留学を支援する教育現場では，日々刻々と変わる世界情勢や国内の公衆・外交政策の方針に応じて，柔軟に対応し，可能な限り留学経験を提供できるように対応している.

大阪大学工学研究科国際交流推進センターでは，主に工学部の学生を対象に，海外研修，理系英語に特化した英語教育，国際交流のプログラム等を提供してきた.

理工系の学生は，文系の学生に比べて留学を希望する学生が少ないのが現状である．一方，留学に興味があっても，単位取得や，学生が所属している研究室の研究計画との調整（バランス）が取れずに，留学することを断念する学生も少なからずいる．そんな中，海外に興味のある学生に人気なのが，夏季休暇期間に留学することができる短期研修プログラムである.

国際交流推進センターでは，学部生には，オーストラリアにあるモナシュ大学での「理工系学部生のための海外英語研修」及び，大学院生には，アメリカのカリフォルニア大学デービス校での「理工系大学院生のための海外研究発表研修」プログラムを提供してきた．海外の大学キャンパスで学ぶプログラムを提供することで，対象学生の国際的感覚，英語能力，コミュニケーション能力，専門科目の学習意欲を向上させ，将来のグローバルな研究者を育成すべく取り組んでいる.

2020年の理工系学部学生のための海外英語研修は，プログラム提供ができない状況となり，学部時代に留学することを断念した学生も少なからずいると思われる．そこで，コロナ禍であってもなんとか海外経験をさせたいと，モナシュ大学との協議の上，2021年度バーチャル留学を実施することとなった．提供したプログラムは，「未来のリーダーとなるためのグローバルコミュニケーション（Global Communication for Future Leaders)」の授業と，阪大理工系向けカスタマイズ授業を合わせて構成した阪大生向け独自プログラムである.

ここでプログラム提供側として関心があるのは，日本国内のプライベート空間から，バーチャルに留学することが，学生に対してどのような影響があり，教育的効果があるのかという点である．例えば，コロナ前の短期夏期研修の参加者は，英語学習意欲に火がついて，帰国後，海外大学院に留学する学生や，大学院に進んでも交換留学制度を利用し長期留学する者や，卒業後，外資系企業に就職する学生が出ていた．それは，学生自身が，現地での経験に裏付けされた「自信」から，次なるステップアップに繋げることができていたからだと思われる.

本報告では，学部生を対象に提供されている，「理工系学部生のための海外英語研修」を例に，バーチャル留学が学生の英語学習意欲に与えた影響とその課題を考察する．長期的な目線でみた将来への影響は測ることはできないが，現状で分かり得る学生への影響を知ることは次年度に向けて意味があると考える.

2. 研修内容

本報告でとりあげる「理工系学部生のための海外英語研修」に参加した学生（2021年度受講生の内訳は、電子情報工学2名、環境エネルギー工学1名、応用理工学1名、基礎工学部1名の合計5名である）を対象に実施したアンケート調査結果（留学前と留学後）及び体験記を下に，バーチャル留学が学生に与えた影響を評価し，コロナ新時代における新たな留学の形とも言えるバーチャル留学について考察する.

2.1 研修の目標

2021年度「理工系学部生のための海外英語研修」は，モナシュ大学の「未来のリーダーとなるためのグローバルコミュニケーション（Global Communication for Future Leaders)」の授業と，阪大理工系向けカスタマイズ授業を合わせて構成した阪大生向け独自プログラムで構成されている.

バーチャル留学全体を通じて，受講生に身につけることを期待したのは次の6点である.

1. これからの時代に求められるグローバルシティズンシップを育むためのトピックを用いて，物事を多角的，多面的に捉えるスキルを伸ばし，コミュニケーション能力やエンプロイヤビリティ（雇用される能力）を高めることを目指す.
2. 授業でのアクティビティを通じて，一つのテーマディスカッションを経験することで，グループでの解決への糸口を導き出すまでを経験することで，主体的に取り組む姿勢及び行動力を身につける.
3. バーチャル課外活動に参加することで，英語力，コミュニケーション力，異文化理解力，幅広い視野を養う.
4. 自分の意見を英語で発表し，議論する経験を積むことで，論理的思考及び英語で自分の意見を発言する力を強化する.
5. 研修参加者は，将来長期留学や研究留学など，更なる飛躍のきっかけとする.
6. 研修参加者が，授業や研究活動において他の学生に影響を与え，結果として学内外へ波及効果を生む.

2.2　バーチャル留学に使用したシステム

本授業では，The Moodle Learning Management System（LMS）を用いた，バーチャルクラスルーム（Monash College's Virtual Classroom）によって実施された．具体的には，Google，Zoom，eBookやQuizizzといった，デジタルラーニングプラットフォームを活用している.

加えて，阪大独自に，交流型SNSである「Slack」でグループを作成し，バーチャル留学中であっても，阪大学生同士で横の繋がり作り交流できるようにした．それにより，孤独なバーチャル留学にならないように工夫した．また，国際交流推進センターの教員が，研修中も進捗状況を確認するなど，「孤独にさせないサポート体制」を敷いた（図1）.

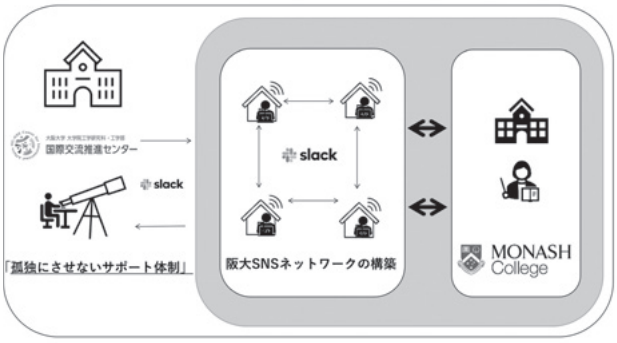

図1　孤独にさせないサポート体制

2.3　バーチャル留学のタイムテーブル

留学プログラムは，研修日程が2つ提供されている．1）8月9日から8月27日と、2）8月16日から9月3日である．各自が，前期試験の日程と調整しながら選択をすることができた．授業は，月曜日から金曜日に開講された．毎日4時間の授業に，学生は毎週10時間以上の自習をするよう推奨された．バーチャル留学の時間割は，表1に示す.

留学開始前7月29日に，阪大独自のオリエンテーションを実施し，留学後9月24日に報告会を実施し，参加者全員で総括を行った.

表1　バーチャル留学の時間割

	メルボルン	日本
1限	10:30-12:30	9:30-11:30
休憩	12:30-13:30	11:30-12:30
2限	13:30-15:30	12:30-14:30
課外活動	15:30以降	14:30以降

オーストラリアと日本との時差は，1時間であるので，時差ボケになることもない点が，受講生の日本での生活に支障が出ることもなく良かったと思われる.

2.4　バーチャル留学に求められる英語能力

語学レベルによって，中級レベルと上級レベルに振り分けられた．それぞれのクラスに求められた語学能力は，中レベルでILETS 4.0-5.0，上級レベルでILETS 5.5-6.5である．最低語学要件はIELTS 4.0（TOEFL IBT 31, TOEFL ITP 400, TOEIC 550）であった．参加学生の中には，語学能力試験を受験したことがない学生もいたことから，英語能力を証明することが一つのハードルとなり，研修への参加を断念する学生もいると思われる.

2.5　バーチャル留学のプログラム構成

プログラムの達成目標，授業構成，及び授業の手法については，レベルごとに設定された．（1）中級レベルでは，文化やグローバルビジネスについてのテーマに対して，流暢に話すことができるようになることを，まず目指す．スピーキングの練習を多く取り入れた授業構成となっている．上級レベルに比べて，英語の話す技術の習得により力を入れたプログラム構成になっている．授業では，ロールプレイやプレゼンテーション，グループディスカッションの手法が用いられた．1日の授業は4

表2　中級レベル：一週間の時間割

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
第1部 毎日英会話	今日の話題	キャッチアップ	ボディーラングエージ	同僚とのコミュニケーション	オンラインミーティング
第2部 毎日英会話	明瞭な表現	批判の方法	ディベート	コミュニケーションの影響	チームワーク
第3部 ストーリーと意見	語るということ	ニュース	オピニオン	ネットワーク構築	ビジネス
第4部 文化	文化と礼儀	文化と人種	慣習と行動	文化と知性	文化とグローバルビジネス

表3　上級レベル：一週間の時間割

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
第1部 メディア	21世紀のニュース	デジタルテクノロジー	デジタルテクノロジー	広告戦略	広告戦略
第2部 都市と街	未来の都市	未来都市の設計	未来の街	成功のためのネットワークの構築	キャリアデザイン
第3部 持続可能な開発	持続可能なファッション	持続可能な開発	持続可能な開発ゴール	新しい働き方	オンラインミーティング
第4部 環境とリスク	人間の年齢	絶滅種	再生可能エネルギー	成功するチームワーク	成功するチームワーク

部構成になっている（表2）。

(2) 上級レベルへは，中級レベルに比べて，すでに英語が話せる学生がクラス分けされる．そのため，文章を読む力，英語で批評できる力，さまざまなトピックについて会話を展開する能力を身につけるための構成になっている．授業手法は，中級レベルと同様である．ロールプレイやプレゼンテーション，グループディスカッションの手法が用いられた．具体的な，一週間を通した授業構成を，表3に示した．

2.6　学生アンケート結果

「理工系学部生のための海外英語研修」に参加した学生を対象に，アンケート調査を留学前と留学後に実施した．2021年度受講生の内訳は，電子情報工学2名、環境エネルギー工学1名、応用理工学1名、基礎工学部1名の合計5名である。留学前アンケートの回答者は5名，留学後アンケートの回答者は4名であった。アンケートでは，留学前後に同様の質問をすることで，バーチャル留学が学生に与えた影響を調査した．それぞれの問いに対し5段階で回答してもらい評価した．以下，アンケート質問項目である．

アンケート質問項目

Q1.　英語が好き（大好き，好き，どちらでもない，嫌い，大嫌い）
Q2.　自分の英語の能力に自信がある（自信がある，少し自信がある，どちらでもない，少し自信がない，自信がない）
Q3.　海外の人と違和感なく気軽に接することができる（違和感がない，ほとんど違和感がない，どちらでもない，少し違和感がある，違和感がある）
Q4.　将来英語圏に留学もしくは，暮らしてみたい（暮らしてみたい，少し暮らしてみたいどちらでもない，暮らしたくない，絶対に暮らしたくない）
Q5.　英語を上達させるためにはいかなる犠牲も払う覚悟がある．この犠牲とは，時間的拘束，金銭的負担などを謂う．（覚悟がある，すこし覚悟がある，どちらでもない，ほぼ覚悟がない，覚悟がない）

1)「英語が好きですか.」の問いについて，バーチャル留学後は，「英語が好き」と回答する学生が増えていることがわかった．留学前は，「少し嫌い」と「どちらでもない」が半数を占めていたのに対し，留学後は，約7割以上が「少し好き」「好き」と回答した（表4）．

表4　「英語は好きですか」

	留学前		留学後
大嫌い	0%	→	0%
少し嫌い	20%	→	0%
どちらでもない	40%	→	25%
少し好き	0%	→	50%
好き	40%	→	25%

2)「自分の英語の能力に自信がある.」の問いについては，バーチャル留学前よりも，英語に対する苦手意識が無くなった学生が多いことがわかる．留学前は「自信がない」「少し自信がない」との回答が，半数の50%であった．一方，留学後は，「自信がある」「少し自信がある」と回答した学生が，半数となった．結果，バーチャル留学によって，英語に対して自信を持つことができている（表5).

表5 「自分の英語の能力に自信がある」

	留学前		留学後
自信がない	33%	→	0%
少し自信がない	17%	→	25%
どちらでもない	50%	→	25%
少し自信がある	0%	→	25%
自信がある	0%	→	25%

3)「海外の人と違和感なく気軽に接することができる」の問いによって，留学後に，より自然体で接することができるようになる傾向が見られた．留学前に「違和感がある」との回答が4割あったが，留学後は，回答者全員が，「ほとんど違和感がない」「違和感がない」と回答した（表6).

表6 「海外の人と違和感なく気軽に接することができる」

	留学前		留学後
違和感がある	40%	→	0%
少し違和感がある	0%	→	0%
どちらでもない	0%	→	0%
ほとんど違和感がない	60%	→	75%
違和感がない	0%	→	25%

4)「将来英語圏に留学もしくは，暮らしてみたい.」の回答に対して，留学前は，「暮らしてみたい」と4割が回答．留学後は，「暮らしてみたい」と回答したのは7割以上であった．バーチャル留学によって，より海外留学や海外での生活に関心が高まっていることが分かる（表7).

表7 「将来英語圏に留学もしくは，暮らしてみたい」

	留学前		留学後
絶対暮らしたくない	0%	→	0%
暮らしたくない	0%	→	0%
どちらでもない	20%	→	0%
少し暮らしてみたい	40%	→	25%
暮らしてみたい	40%	→	75%

5)「英語を上達させるためにはいかなる犠牲も払う覚悟がある．（この犠牲とは，時間的拘束，金銭的負担などを謂う)」の回答に対して，留学前・後では，特に回答傾向に変化は無かった．研修に参加した学生は，夏季休暇の期間をバーチャル留学に充てており，すでに時間的，金銭的な負担を厭わず，挑戦している学生たちであり，彼らの意識に変化は見られなかった．

2.7 バーチャル留学報告書にみる学生の振り返り

報告書には，「研修に応募した動機と目的」，「体験した活動内容」，及び，「研修で得られた気づきと将来的な目標や夢にどう繋げるか」について記載するように留学前オリエンテーション時に課題を提示し，研修後，5名全員が提出した．本稿では，「研修で得られた気づきと将来の目標や夢にどう繋げるか」に記載された内容を取り上げて，バーチャル留学が学生に与えた影響を示す．

1)「研修で得られた気づき」についての記述

- 今までとは違うコミュニティを通じて，自分の価値観がアップデートされ，固定されていた視野が一気に自由に広がったように感じ，行動範囲のリミッターがなくなりました．
- 課外活動に参加した時，全然聞き取れず，ZOOMを退出してしまいました．その後とても後悔し，逃げないようにしようと決めました．次の日の授業から間違えて恥をかいてでも発言するようにし，意識が変わりました．
- 「英語に免疫がある」という事は何をするにしてもプラスなことだと思う．
- 日本人同士で英語を使ってコミュニケーションを取る場合，生活の文化が同じであるため簡単な単語の羅列やジャスチャーなどを使えば伝わることが多かったことに対し，日本人以外の人とコミュニケーションを取る場合は違う文化圏であることを意識しながら，どのように説明すれば伝わるのかを考える必要がありました．どのコミュニケーションも非常に面白く，様々な人と同時に交流できる本研修で知見だと思います．
- 授業で，グループディスカッションをしている時に気づいたことがあります．それは，英語を母国語とする人々のように流暢に英語を話せるようになるには，英語で話す時に，話す時だけでなく頭の中で考える時にも英語を使う努力をする必要があるという

ことです.

2)「将来的な目標や夢にどう繋げるのか」についての記述

- オンラインであっても国境をこえて情報発信をしたいし，プログラム中に学んだような問題を解決する架け橋になりたいというのが私の目標です.
- 海外で働くためには語学力は最低条件で，専門性や人と違う経験がなければならないと聞き，英語を勉強するだけではなく自分の強みを作らなければと思いました.
- 先生は英語の勉強は毎日続けないと意味がないと言っていたので，毎日少しでも英語に触れようと思いました.
- 将来の目標のためには言語・非言語コミュニケーションの両方が大切であり，まず語彙を伸ばすこと，および海外の方と交流する場に積極的に参加していくことが必要だと改めて感じました．本研修の経験を活かして，お世話になった先生や交流した生徒といつかまたお会いした時に感謝の気持ちを伝えきれるような良いコミュニケーションがとれるよう成長していきたいです.
- 今回の研修で他国の友達も出来たので，交流を続けていきたいです．実際に，研修後もオンラインイベントを主催し，交流を続けています.

図2　課外授業の一場面

2.7　現地留学報告書にみる学生の振り返り

1)「研修で得られた気づき」についての記述

- 海外の人は自立していると感じた．日本は島国で在日外国人がそこまで多いわけでもないので感じないが，オーストラリアは移民も多いため自分の意思がすごく大事だと気がついた.
- 海外という壁が自分のなかで低くなった.
- これからどのように英語を習得していけばよいのか，実践的に英語でコミュニケーションをとったことで，次のビジョンが見えてきた.
- 日本人に比べて海外の人は積極的であるのだと感じた．ただ単に海外の人の積極性を見習うのではなく，時と場合を考えた適切な積極性を身につけることが必要だと思った.
- 時間を守ることに対する意識の差を感じた．日本人は授業の開始時刻に余裕をもって登校していましたが，他の国の学生は，時間丁度に来るか少し遅刻してくるのが当たり前でした.
- これが日本を外から見るという事なのかと感じる場面が何回もあった．今後は視野を広げ，いろいろな観点から物事を見たい．例えば日本を脅かす程急成長を遂げているアジア諸国は，日本をどう見ているのか．そのためにも英語のレベルアップは不可欠です.

2)「将来的な目標や夢にどう繋げるのか」についての記述

- 海外と関わる仕事がしたい.
- 海外に赴任するなど，よっぽどのことがない限り，海外に住むことは考えないと思います．しかし，英語でもコミュニケーションがとれることが分かったので，これからも留学生や在日外国人と関わる機会を作っていきます.
- 今回の経験で，もう少し英語力を磨けば，意外と海外に出て活躍することは難しくないのではないかと思った．まず日常会話をある程度できる英語力を身につけたい.

3.　考察

本稿では，バーチャル留学が学生に与える影響とその効果について，参加学生のサンプル数（5名）は少ないながら，初年度の取り組みについて検証することができた.

アンケート結果によると，今回の研修によって，より英語が好きになっている傾向がみられ，留学前よりも，英語に対する苦手意識が無くなっていた．もちろん，現地留学同等とは言えないが，物理的な環境の変化が無くても，英語に対して自信を持つ体験ができていることがわかった．海外の人（外国人）への違和感についての質問結果に注目したい．外国人への違和感というのは，どうしても英語を話すときに身構えてしまうなど不自然な反応としてコミュニケーションに現れる．学生は，留学

などの海外経験によって，初めて「外国人」というハードルを超えて「海外の人」と交流することができるようになる．アンケートの結果から，外国人への違和感が無くなっている傾向が見られた．これは，日本の講義室でのネイティブによる授業とは異なり，バーチャル留学だからこそ得ることができた，現地留学に近い体験ということができる．また，7割以上の学生が，将来海外に留学または住みたいと回答しており，海外への夢をより明瞭に持つ機会となっている．

学生の報告書からは，現地留学に近い体験を得ようとする「貪欲さ」が見えてきた．参加者全員が，研修後も意欲的に英語学習を続けていくと決意しており，バーチャル留学は，英語学習意欲の向上を促すことが明らかになった．

しかし，現地留学のような，現地での体感からのみ得られる「気づき」は，バーチャル留学では得ることはできなかった．文化体験について言及する記述は，バーチャル留学には見当たらない．言い換えれば，文化体験を除いては，英語学習に集中することが出来ており，現地に行けていないからこそ，海外留学への意識を一層募らせている学生が多く見られた．現地留学の学生には，「今後，海外に住むことはない」と断言する学生がいたが，バーチャル留学では，そのような記述は無かった．

コロナ禍の新たな留学を成功させるポイントは，海外大学から提供される授業を，そのまま学生に横渡しするのではなく，事前に，海外の授業を受けるコツを伝授する「オリエンテーション」や，事後の「学びの総括」を行うことが重要であるように思う．

次年度以降のバーチャル留学の企画において注意するべき点は，3点ある．質の高い教育を提供できる提携校と組むことは前提条件であるが，①時差への配慮，②孤立させない体制づくり，③放置しないサポート体制である．

今回の留学プログラムが成功したのは，学生の意欲もさることながら，オーストラリアと日本の時差がたった1時間であったことは無視できない．バーチャル留学では，時差によって，学生のモチベーションを維持することが難しくなることもある．時差への配慮も必要である．

バーチャル留学は，通常のオンライン授業同様に孤独を感じるものである．そこで，研修中のコミュニケーションに交流型SNSを用いて，参加者を孤独にさせない体制を敷いたことは，モチベーション維持に役立った．

放置しないサポート体制として，提供される授業内容から，教員が予測して，事前に準備しておくべきことを伝えることも効果的である．例えば，本プログラムでは，授業はじめには必ず自己紹介をするので，大阪人らしいユーモアを混ぜた自己紹介文を準備しておくように伝えていた．現地で感じるワクワク感を持ってもらうよう情報提供の仕方にも工夫した．

教育の本流をプログラム提携校に任せて，補足的なサポートを十分に行う体制を整えることが成功の鍵かもしれない．後日，参加者の半数以上が，留学の相談に来ており，現地留学に向けて，各自準備を始めている現状である．今後も，国際交流推進センターで，彼らの留学を支援していく所存である．

4. まとめ

本稿では，バーチャル留学のプログラム構成，学生への教育的効果，また，英語学習意欲にどのような変化を及ぼすのかを考察してきた．留学前及び留学後のアンケート調査結果，及び報告書の記載内容の分析によると，バーチャル留学においても，オンサイト留学と同様の海外経験を積むことができていることがわかった．また，留学後も更なるステップアップを目指す学生が多く，英語学習意欲向上がみられた．「新たな日常」となったバーチャル留学は，日本の大学における充実したサポート体制と，プログラム提携校との協働によって，より効果的なプログラム提供が可能となることが分かった．

謝辞

本プログラムの一部は，Takeda Works研究助成金，アジア人材育成のための領域横断国際研究教育拠点形成事業（CAREN）教育助成金により実施された．また，企画・運営には，モナシュ大学の櫻木真由美氏にご尽力いただいた．工学研究科国際交流推進センターの寺井智之教員，中橋真穂教員，野尻郁子氏，加藤雅弓氏にもご協力いただいた．誌面にて感謝申し上げる．

受付2021.11.13／受理2022.1.13

参考文献

[1] Johns Hopkins, CORONAVIRUS RESOURCE CENTER, https://coronavirus.jhu.edu/map.html, 2021年11月9日 参照．

[2] 藤田清士，辻敏彦，コロナ新時代の学生交流:大阪大学周年事業オンライン特別講義プログラムの実施について，(2021)，生産と技術，第73巻4号，pp.1-4.

[3] 大阪大学，コロナ新時代における大阪大学の取り組み，(2020)，https://www.osaka-u.ac.jp/ja/oumode/101, 2021年11月9日参照.
[4] 2020年度理工系大学院生のための海外研究発表研修コース実施報告書.
[5] 2020年度理工系学部のための海外英語研修コース モナシュ大学実施報告書.
[6] 張希西, 李明, エントゥルアリウナ, 石川真由美, 小溝裕一，(2020)，コロナ新時代における国際交流活動の展開，大阪大学高等教育研究，9, pp.41-49.
[7] 中橋真穂，アンダーソンション，野尻郁子，柳田亮吾，藤田清士，(2017)，理工系学生のための欧州短期派遣プログラム，大阪大学高等教育研究，6, pp.33-40.